

## マルガリータ・ビラ・ダ・ビラ教授（ボリビア、サン・アンドレス・デ・ラパス大学）講演会「アンデスに生きる西洋中世…キリスト教会と先住民芸術における『人魚』の表現をめぐって」

報告 久米順子

二〇一三年から二〇一四年にかけては、日本とスペインの交流四〇〇周年を祝う記念年であった。本学ではスペイン語のスタッフを中心に東京外国語大学日西交流四〇〇周年実行委員会を立ち上げ、いくつものイベントを行った。この講演会はそのうちのひとつである。東京外国語大学総合文化研究所および長崎純心大学の共催を得て、二〇一四年三月三日（月）一三時三〇分から本学の留日センター一〇三教室にて開催された。

長崎純心大学の浅野ひとみ氏による日本学術振興会外国人研究者招聘事業で来日したボリビアのマルガリータ・ビラ・ダ・ビラ教授は、スペインの北西部のビーゴ生まれ。サンティアゴ・デ・コンポステラ大学で中世美術史を学び、博士号を取得された。結婚後、ボリビアにわたり、同国のサン・アンドレス・デ・ラパス大学で教鞭をとっている。現在はラテンアメリカで展開したコロナリアル様式にも関心を持って研究を進めているとのことだ。

今回の講演「アンデスに生きる西洋中世…キリスト教会と先住民芸術における『人魚』の表現をめぐって」では、人魚の画像とシンボリズムの変遷が、広範な年代と地域の作例に基づき、精緻に分析された。人魚は実にさまざまな文化圏の造形文化や文学に登場するモチーフである。ラテンアメリカのアン

デス地域でも、ケーロ（木製壺）や教会ファサード（正面）の浮彫装飾などにあらわれる。これらは、これまで同地の先住民神話に基づく画像と解釈されてきた。しかしビラ・ダ・ビラ教授は、アンデス地域の人魚モチーフは、ヨーロッパのキリスト教美術から植民地時代に伝播し、時代とともに変容していったものではないかとの立場をとる。

スライドで次々に提示された作例を含めて情報量がきわめて多く、講演者同様、中世美術を専門とする浅野ひとみ氏の通訳にもかかわらず、正直筆者は話の流れについていくのに精一杯であったが、人魚というごく小さなモチーフから先住民芸術とキリスト教芸術の交錯した関係が浮かび上がる様は非常に興味深いものであった。また、アンデルセンの『人魚姫』のテキストを中心に研究を進めているという「プロジェクト人魚」の方々をはじめ、人魚への関心と愛にあふれた聴衆を得て、講演後も活発なやり取りが交わされたことを付記しておきたい。